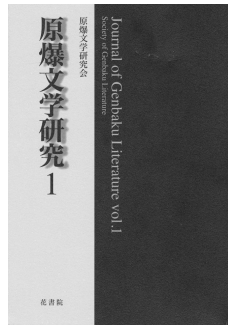


◎ 『原爆文学研究』総目次（1～10号）

第1号（二〇〇二年八月一日発行）



批評

- 原爆言説の日本の形成―記憶の形成と証言台の証言人―
 「原爆文学」という問題領域・再考
 アメリカ占領下における「プロテスタントキリスト者」の
 〈原爆意識〉―長崎を視座として―
 「原爆文学」の周辺―『沈黙の艦隊』を巡って―
 「原爆乙女」の物語
 井上光晴「手の家」の構図
 「不謹慎」のゆくえ―「体験」をめぐる―
 「原爆文学」探査① 井上靖 『城砦』
 エッセイ
 新教徒キリスト者・原爆禍中の無識慰撫化
 在るしかない―竹山広（全歌集）と山田かん詩集「長崎礎
 泊所」―
 原爆を歌うということ
 「広島に文学館を！市民の会」について
- | | | | | | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 花田俊典 | 川口隆行 | 服部康喜 | 田崎弘章 | 中野和典 | 長野秀樹 | 内田友子 | 坂口 博 | 山田かん | 中里喜昭 | 中原 豊 | 水島裕雅 |
| 2 | 15 | 22 | 34 | 58 | 72 | 80 | 86 | 90 | 93 | 97 | 101 |

「原爆」「原爆文学」「私」
 ファットマンに真珠
 井上光晴「手の家」と深沢七郎『橋山節考』
 様々の、語られざる想い

エッセイ II

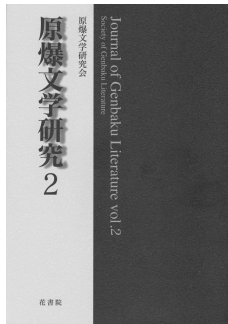
最近思う事

原爆文学研究会第3回例会寸感

詩

記念写真

第2号（二〇〇三年八月一日発行）



批評

- 原爆文学と日本ペンクラブの「ヒューマンイズム」
 自動変換システムと副作用―「黒い雨」盗作騒動、その他―
 今村昌平と原爆の表象
 不完全の勇氣―「長崎原爆乙女」の物語と『マリアの首』―
 「原爆文学」探査② 千田夏光『終焉の姉妹』
 責任と被爆者援護―大江健三郎「アトミック・エイジの守
 護神」を視座として
 平和、恐怖とフラクシシユタイン博士―オーストラリアの新
- | | | | | | | | | | | | | |
|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 李在錫 | 山内正幸 | 秋山康文 | 山口康子 | 大木鍊山 | 南 嘉久 | 中原澄子 | 石川 巧 | 内田友子 | 野坂昭雄 | 服部康喜 | 坂口 博 | 中野和典 |
| 104 | 107 | 108 | 110 | 112 | 112 | 114 | 2 | 15 | 24 | 32 | 43 | 47 |

聞に於ける原爆投下の報道—— パーナビー・ブレイデン

『The Irish Times』誌の原爆投下に関する記事について 65

フランスの原子爆弾投下直後の報道をめぐって
ローナン・ハンド
イザベル・エロワ 77

エッセイ
中里喜昭 84

『失われた言葉求めて』について
南 嘉久 86

峠三吉没後五〇年、文学資料展からみえてくるもの
池田正彦 89

実録 分散教育のころ
中原澄子 91

私たちの暴力と彼らの暴力
李 在錫 94

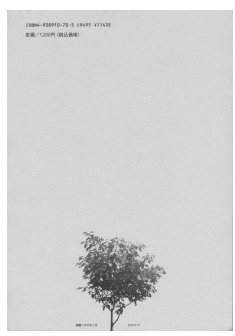
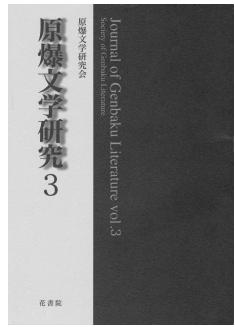
可能性とつぶきと—グスコブドリのなかにホレイシヨ
秋山康文 108

—は—
大木錬山 103

国連と核の問題に思う
川口隆行 111

書評
小沢節子著『原爆の図 描かれた〈記憶〉、語られた〈絵画〉』

第3号（二〇〇四年八月三一日発行）



批評
被害と加害のディスクール—戦後日本の「わたしたち」—— 川口隆行 2
大田洋子論・序説—〈原爆作家〉としての神話／からの逸

脱—
利用／乱用される被爆の記憶
亀井千明 23

核シエルトアという文学空間—『レベル・セブン』・『洪水
新木武志 28

はわが魂に及び』・『方舟さくら丸』——
中野和典 43

坂口安吾『安吾の新日本地理 長崎チャンボン—九州の巻
—』 試論—原子爆弾になってしまった男の話、あるいは、
境界線と境界境域とをめぐって—

八月十二日の原爆—檀一雄『新カグヤ姫』のはずし方—
秋山康文 60

大江健三郎『核時代の森の隠遁者』論
内田友子 72

「原爆文学」探査③ 原之夫『ふたつの街』
楠田剛士 78

エッセイ
坂口 博 83

ブレイブ・ニュー・サンライズ—ポストモダン「原爆」体験、
回顧録—
パーナビー・ブレイデン

戦争—国民はどう扱われてきたか—
中原澄子 88

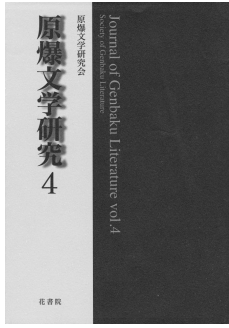
ピーター・タウンゼント作・間庭恭人訳『ナガサキの郵便
配達』を読む—重ね合わされた二つの声—

長崎平和祈念式典 山崎榮子「平和への誓い」の持つ意義
田崎弘章 126

花田俊典先生の急逝を悼んで
長野秀樹 135

水島裕雅 140

第4号（二〇〇五年八月三一日発行）



批評

原爆とエロス生の衝動―川上宗薫の自伝的小説をめぐって― 石川 巧
 峠三吉の詩―目取真俊「水滴」と戦争詩を補助線として― 野坂昭雄
 アウシュヴィッツ／ヒロシマ―文学と表象、記憶の義務から聡
 明なカタストロフィー論へ― ジャン＝リュック・パジェス(西村和泉訳)
 メディアとしての漫画、甦る原爆の記憶―こうの史代『夕
 風の街桜の国』試論― 川口隆行

原爆文学研究への一補助線―表象不可能性とイマージュを
 めぐるノート― 柳瀬善治

「原爆文学」探査④ 丸元淑生『秋月へ』 坂口 博

小特集 大田洋子再考

昭和二五年版『屍の街』の文脈―大田洋子が見極めた被
 爆五年後― 亀井千明

一九五三年のルポルターージュ／文学 楠田剛士

心象風景としての被爆都市―大田洋子『夕風の街』と人― 中野和典

一九五三年の実態―』論― 130

エッセイ

〈平和運動〉の描かれ方―「ヨイコト」はよくないことか― 内田友子

爆弾は実在する―ティム・オブライエン作・村上春樹訳『ニ
 ュークリア・エイジ』を読む― 田崎弘章

比喩としての戦争と夕風に関する断片―過去・未来・現在― 秋山康文

書評

榎木野衣『戦争と万博』 波瀲 剛

173 166157 148 130 120113 109 93 83 47 32 2

増刊号(二〇〇六年三月一日発行)



シンボジウム
 原爆をどのように語りうるか―原爆を描くこと、受容する
 ことをめぐって―

小沢節子 2

直野章子

田崎弘章

柳瀬善治

川口隆行

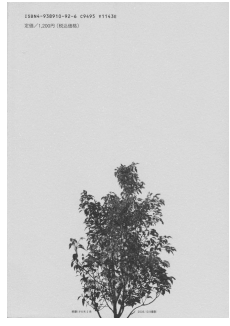
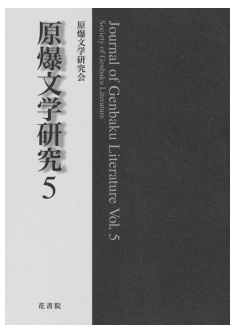
中野和典

67

書評

中原澄子『天草へ帰った被爆者』

第5号(二〇〇六年一〇月三十一日発行)



批評

阿川弘之『魔の遺産』の方法―写真・引用・聞き書き―
大田洋子と原爆と志賀直哉―原爆に対する文学的作用をめぐって―
科学としての原爆

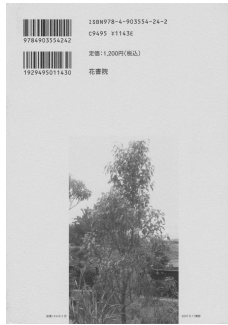
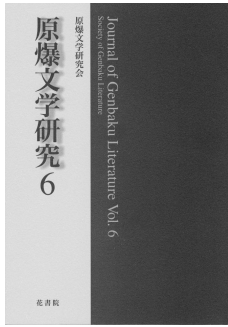
忘却の彼岸―後藤みな子『刻を曳く』論―
「原爆文学」探査⑤ 山福康政『焼け跡に風が吹く』
亀井千明 19
長野秀樹 26
中野和典 38
坂口 博 45

書評

福岡良明著『「反戦」のメディア史 戦後日本における世論と輿論の拮抗』、吉村和真・福岡良明編著『「はだししゲン」がいた風景 マンガ・戦争・記憶』
川口隆行 49
柳瀬善治 58
野坂昭雄 65

米山リサ著『広島 記憶のポリテクス』

第6号（二〇〇七年十二月―四日発行）



批評

「原爆（文学）研究」の視角／死角―被爆の経験とどのようにに出会い、出会うまいか―

映画から学ぶヒロシマの語り方―『二十四時間の情事』のテキスト分析を通して
畑中佳恵 2
高野吾朗 21

触媒としての身体―大田洋子「暴露の時間」論―
中野和典 39

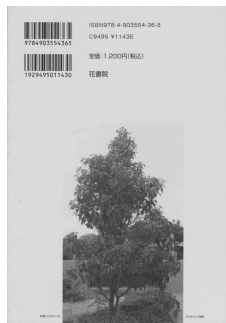
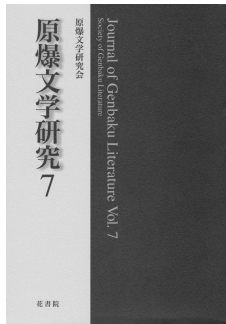
「概観的な時代」の「終末観」と「民族的憤慨」―三島由紀夫における原爆表象―
柳瀬善治 54

「となり町戦争」と「東海道戦争」―知らない戦争のリアリティーを追う―
内田友子 71

「原爆文学」探査⑥ 南里征典『獅子は闇にて涙を流す』
坂口 博 77

映画評
映画『ヒロシマナガサキ』―THE DESTRUCTION
IS NOT ENDED―
楠田剛士 81

第7号（二〇〇八年二月二〇日発行）



批評

「死の島」の結末くピキニ実験前の時間設定について―
上村周平 2
〈夢千代日記〉における原爆・白血病・吉永小百合
石川 巧 9
林京子「長い時間をかけた人間の経験」論
野坂昭雄 41

長い時間をかけた作家の経験―「汚染の言説」として読む「原爆文学」―
松永京子 57

「原爆文学」探査⑦ 中村真一郎／福永武彦／堀田善衛
「発光妖精とモスラ」
坂口 博 73

特集 原爆文学研究への展望―川口隆行『原爆文学』という

『問題領域』を視座として

「畏」について学びつつ、「畏」について問い返した二十五

77

分間

個人的関心から

未来への付記

遂行的な憑依あるいは分有される単独——一つの方法的批評の試み——

ロベルト・ティベリ

89

高野吾朗

長野秀樹

柳瀬善治

中野和典

書評

中原澄子『長崎を最後にせんばー原爆被災の記憶』

中野和典

104

作品紹介

散文詩 田園交響曲

上野英信（解題坂口博）

107

エッセイ

祈りー第三十六回北九州市原爆犠牲者慰霊平和記念式典にてー

山田まゆみ

112

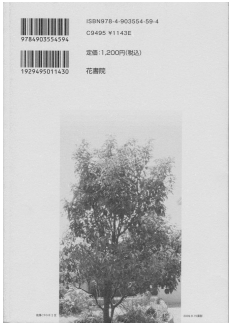
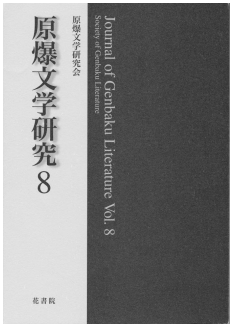
小説

あともう一步で

高野吾朗

115

第8号（二〇〇九年十二月二日発行）



批評

核エネルギー言説の戦後史ー原子核物理学者を中心にー 山本昭宏 2

大野允子『ヒロシマの少女』論ーおとなになるとはどいうことかー

ロベルト・ティベリ

16

原爆テクスト教材論① 大牟田稔「平和のとりでを築く」

川口隆行

27

「原爆文学」探査⑧ 城山三郎『大義の末』

坂口 博

36

小特集 原爆表象の六〇年代と三島由紀夫

六〇年代の三島由紀夫ー『美しい星』から『豊饒の海』へー 野坂昭雄

40

純文学論争、SF映画・小説と三島由紀夫『美しい星』

50

『破綻としての原初』あるいは『分配される終末』ー三島

山崎義光

69

由紀夫の文学ー自由観と「小説の終焉」についてー

柳瀬善治

69

特集 〈広島／ヒロシマ〉をめぐる文化運動再考

特集にあたって／冒頭提起

川口隆行／道場親信

89

《報告》

峠三吉と「われらの詩の会」

水島裕雅

95

山代巴の文学／運動

竹内栄美子

110

山田かんとサークル誌

楠田剛士

125

「原爆の図」全国巡回展の軌跡

岡村幸宣

140

丸木スマと大道あやの「絵画世界」

小沢節子

169

「原爆を許すまじ」と東京南部ー50年代サークル運動の「ピーク」をめぐるレポート

道場親信

190

《コメント》

戦後サークル詩運動のなかの『われらの詩』

宇野田尚哉

107

山代巴を読み継ぐことへの希望

松本麻里

121

長崎と佐世保の文化運動への一視点

坂口 博

135

「原爆の図」全国巡回展をめぐる現象としての絵画

山本唯人

183

〈広島／ヒロシマ〉と音楽

波瀲 剛

188

《研究会批評》

〈広島／ヒロシマ〉と音楽

小田智敏

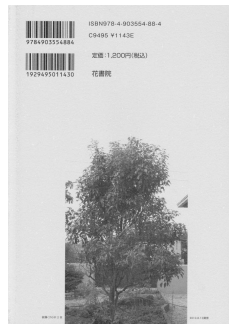
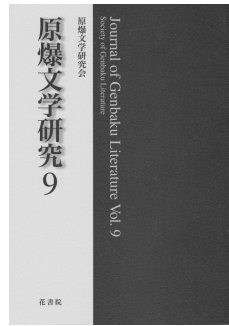
204

合同研究会の経緯と成果

「原爆言説」と「戦後文化運動」の接点をさぐる
飼い馴らされることのない詩と批評の力を今ここに

鳥羽耕史
茶園梨加
柿木伸之
217213210

第9号(二〇一〇年二月二十五日発行)



批評

加害の記憶・長崎の「原爆の凶」展―長崎における一九八〇年代の反核・平和運動―

被爆者表象の遠近法―「日常生活の冒険」論―
山本昭宏 2

主体のゆらぎ―大田洋子「山上」を中心に
中野和典 24

峠三吉「墓碑」と一九五〇年夏の広島
黒川伊織 39

「原爆文学」探査⑨ 上野英信『黒い朝』
坂口 博 51

特集 原爆表象／文学と政治的リアリズム
誰が広島を詠みうるか？
松澤俊二 57

原爆を目撃した画家、しなかつた画家―原爆の目撃とその
加治屋健司 69
視覚的表象
「知的概観的な時代」の「表現行為」について―三島由紀夫を視座として「加害」と「被害」を考える
柳瀬善治 87
コメント・全体討論
岩崎 稔 102
加納実紀代

第10号(二〇一一年二月二十五日発行)

「当事者」になるといふこと―シンポジウムを振り返って
リミットをめぐる―シンポジウム「原爆表象／文学と政治的リアリズム」を振り返って
深津謙一郎 124
水川敬章 127

批評

試論：小説・戯曲・映画・絵画における被爆者の「性的」描写について
高野吾朗 2

核批評と核SF
野坂昭雄 27

過視的な終末あるいは襲のなかの偶有―二〇世紀表象史再考からサヴァイヴアルの技法へ―
柳瀬善治 40

空洞化する言説―井上光晴『西海原子力発電所』論
中野和典 72

街を記録する大田洋子―『夕風の街と人』と一九五三年の実態―論―
川口隆行 83

占領下における被爆体験の「語り」―阿川弘之「年年歳歳」
山本昭宏 101

「八月六日」と大田洋子『屍の街』を手がかりに―
岡村幸宣 112

占領下の「原爆の凶展」―室蘭と美唄の記憶
池野清、池野巖―
楠田剛士 120

「われらのうた」総目次
川口隆行・山本昭宏 138

「原爆文学」探査⑩ 火野葦平『革命前後』
坂口 博 186

書評
ジョン・W・トリート『グラウンド・ゼロを書く―日本文学と原爆』
齋藤 一 190
エッセイ

特集 原爆文学研究会一〇年―これまでとこれから

雑誌偏愛

「それだけ？」のあと

近況報告に代えて

この十年、次の十年

ダブル・シンク（二重思考）―一九四九年の符合―

裏切る

「出来事」の語りから「人生」の語りへ―被爆者のライフ

ストーリー―聴き取りをめざして

『刻印』

あのことのこと

石川 巧

内田友子

小沢節子

坂口 博

田崎弘章

茶園梨加

富永佐登美

永川とも子

中野和典

209207205

204202201198196194

一番はじめの出来事

『HIROSHIMA 1958』の視線

これまでを振り返って

二月から遠く隔てられて

「原爆文学研究会」と私

レッド・ステイトで原爆を語るということ

膨大な死の前で

共感―「際どい中間あたり」を視つめる内田友子さん

十年目の節目に

近況と「N」の話 原爆文学研究会十周年に寄せて

長野秀樹

中原 豊

波瀾 剛

畑中佳恵

服部康喜

松永京子

村上陽子

八田千恵子

柳瀬善治

山本昭宏

229228227225222220218217215212